

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32409

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23017

研究課題名（和文）現代の情動の哲学の知見を踏まえた、合理性の向上による道徳エンハンスメントの可能性

研究課題名（英文）The Potential for Moral Enhancement Through the Improvement of Rationality,
Based on Insights in the Contemporary Philosophy of Emotion

研究代表者

林 禅之（Hayashi, Yoshiyuki）

埼玉医科大学・医学部・助教

研究者番号：90846867

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、以下の成果を得ることができた。(1)認知・思考能力を増強することによる、情動を間接的に制御する形での道徳エンハンスメントの可能性を探った。京都大学にてワークショップを開催した。また、国外（シンガポール）でのワークショップで研究発表を行った。(2)無意識的な痛みについてのサーベイを進め、概観的な研究発表を国外（ブルガリア）のシンポジウムで行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、認知エンハンスメントを通じた道徳エンハンスメントの可能性の検討を通じて、道徳エンハンスメントをめぐる議論のより一層の明確化をもたらした。また、無意識的な痛みの可能性という、重要であるが看過されてきた問題を整理・検討することで、議論を前進させようとした。以上の成果は、今後の更なる展開も期待されるため、今後も継続して研究を進める。

研究成果の概要（英文）：This research (1) investigated the feasibility of moral enhancement through the indirect modulation of emotion using cognitive enhancement, and (2) provided an overview of the problem of unconscious pain. For (1), a workshop was held at Kyoto University, and an oral presentation was given at an international workshop in Singapore. Regarding (2), an oral presentation was given at an international symposium in Bulgaria.

研究分野：哲学

キーワード：道徳エンハンスメント 情動 痛み

1. 研究開始当初の背景

人間の道徳性を人為的に向上させることは、「道徳エンハンスメント」と呼ばれる。これは従来、主に教育やメディアによる啓蒙、あるいは道徳的な議論という形で行われてきた。こうした伝統的手段によるもののみならず、薬物や遺伝子編集といった方法での生物医学的道徳エンハンスメントの実現可能性および是非が、とくにこの15年の間、盛んに論じられてきている。

とくに先行研究では、道徳エンハンスメントの方法として、気分や情動に働きかけることで、道徳性を改善しようとする方針が主に論じられてきているように当初は思われた。本研究では、現代の情動の哲学の知見を踏まえながら、むしろ認知能力の増大による道徳エンハンスメントの可能性を探る。ここで認知能力とは、主に思考に関わる能力のことである。つまり問題は、認知エンハンスメントが道徳エンハンスメントにつながるのか、と表現できる。

近年の情動の哲学の知見からすると、情動と思考の関係は一枚岩ではなく、思考が物事を決め、情動がそれを動機づける、といった一般的見解以上に複雑な関係をなしている。それゆえ、道徳エンハンスメントの実現のために、道徳的判断、行為、情動、そして認知エンハンスメントの関係を詳細に分析することが必要となる。道徳心理学ないし応用倫理学での道徳エンハンスメントというトピックと、心の哲学ないし情動の哲学での新たな情動観を接続させることで、広くは道徳について新たな1つの展望を開くことが企図されていた。

2. 研究の目的

本研究は、心の科学と哲学の成果を取り入れた最新の情動の哲学の知見を踏まえながら、合理性と情動の関係を再考することで、認知能力の増大による道徳エンハンスメントの可能性を探求する。それによって、応用倫理学における道徳エンハンスメントの議論をより明確化し、前進させることを目的とする。また、思考能力や情報処理能力が人間の合理性をも高めるのか、合理性の高まりは弊害をもたらさないのかといった、より基礎的な問題群を考察することも目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、道徳エンハンスメントの倫理的是非そのものを問うというよりはむしろ、仮に、特定の個人が自発的に道徳エンハンスメントを行うことが道徳的に許容されると前提した上で、具体的にどのようなタイプの生物医学的エンハンスメントのあり方が望ましいのかを考察する。先行研究を調査し、概念的な整理検討を行うことで、こうした問いに答えようとした。その際、文献の検討から予期しなかったような検討に値する問題が浮上してくる可能性があるため、大まかな目標を定めながらも、色々寄り道しながらじっくりと考えてみるという方針を立てた。

4. 研究成果

本研究を行った結果、(1)(2)の成果が得られた。また、本研究を実施した際にはさまざまな試行錯誤を行なった。成果物の公表までは至らなかったが、それら試行錯誤の途中経過として、萌芽的・暫定的な議論を(3)に記載する。

(1) 情動の間接的な調節による道徳エンハンスメントの可能性

認知能力を増強することによる、情動を間接的に制御する形での道徳エンハンスメントの可能性を探り、国内外のワークショップで発表した。これらの発表では、哲学者 Thomas Douglas や、Brian D. Earp らの議論を批判的に検討しながら、どのような認知能力のエンハンスメントが道徳エンハンスメントにつながるのかを、自己制御能力・意志力、推論能力、集中力といった要素に分けながら具体的に検討した。その際、共時的な(ある1時点での)認知制御と、通時的な(時間を通じた)認知制御の2つに分けて考察することを提案した。

このような議論を通じて、先行研究の不明瞭な部分を明確化し、今のところ、道徳エンハンスメントには認知能力の増強も併用が可能だ、というかなり弱い結論しか出ていないが、今後さらに検討を続けていく。とくに、思考が全体論的に情動を制御しているという可能性を視野に入れていく。

(1)に関連して、ワークショップを開催した。このワークショップでは、近年の道徳エンハンスメントの議論をおさえつつ、情動と環境という2つの観点から道徳エンハンスメントの実現可能性を考え直した。まず、適切に情動を調節することは、どのような仕方で道徳性の向上に寄与し、またそれはどのようにして実現可能なのかを探った。また、私たちが道徳的に行為する際、自信を取り巻く環境のあり方から大きな影響を受ける。環境のデザインや道具使用による道徳エンハンスメントは、生物医学的な道徳エンハンスメントに比べてどのような利点があり、逆に

どのような問題を孕んでいるのかを明確化した。研究協力者の高木裕貴、福原慶の2人と申請者を含む3名が発表を行い、密な議論を行なって内容を深めた。

(2) 無意識的痛み

人工多能性幹細胞を分化誘導して作出された「脳オルガノイド」の倫理研究に従事した経験と、(1)の研究から派生して、痛みを分析を早急に行うべきだと考えた。とくに、逸脱的な事象に着目することで、当該事象の理解が逆に深まるのではないかとの見込みから、無意識的な痛みについての考察を行った。

この無意識的痛みの可能性について、概観的な研究発表を国外のシンポジウムで行った。通常、痛みは必ず意識的な心の状態であると考えられている。しかしこの考え方に対して、無意識的痛みが存在する可能性を肯定的に論じる哲学者がいる。もし、実際に無意識的痛みが存在するのだとして、その無意識的痛みが苦しみを引き起こすのであれば、無意識的痛みに対してそれを未然に防ぐべき理由が生じる。他方で、もし無意識的痛みが存在しないのであれば、無意識的な主体は決して痛みを持つことがないだろう。無意識的痛みに至る推論の道筋は2つあり、意識理論からの推論と、無意識的知覚からの推論に分けられる。それぞれの推論の道筋が吟味されなければならない。また、より基礎的な概念的問題、たとえば痛みと苦しみとの関係や、痛みがどのような本質を持つのか・あるいは持たないのか、といった問題が残る。いずれにせよ、無意識的痛みの問題は、痛みの本性を再考する契機となりうる。このようなことを論じた。

無意識的痛みの問題は、世界的にもまだあまり盛んに論じられていないように見える。しかし、本研究が示したところによると、無意識的痛みの問題は実践的な含意を持ちうる。それゆえ、本研究はまだ基本的な問題提起に留まっているが、問題設定は新しく、重要なものである。今後、とくに痛みの指令説や表象説に無意識的痛みがどのような理論的制約を課すのか、明確にしていく予定である。

(3) 以下の2つの萌芽的研究を行った。

① 道徳エンハンスメントとアイデンティティ

道徳エンハンスメントが、「その人らしさ」「本来のその人であること」といった心理的アイデンティティにどのように影響するのかを探った。道徳エンハンスメントとアイデンティティについての先行研究は、現在のところあまりない。そのため、他の領域での議論枠組みを借用しようと試みた。現在、医療技術との関連で盛んに論じられているのが、深部脳刺激(DBS)がアイデンティティにどのような影響を与えるかという問題である。典型的にはパーキンソン病の諸症状に対処するために、電極を脳深部に侵襲的に埋め込み、微弱な電流を流すことによってその症状を抑えるということが行われている。電極を埋め込まれた患者は、パーキンソン病による症状を改善することができたとしても、副反応として性格や行動傾向に変化が見られることが報告されているようだ。道徳エンハンスメントも、道徳性という人の価値観のコアとなる部分を変化させることから、アイデンティティに大きな影響を及ぼすことが予想される。この問題について、文献調査と考察を行ったが、結論を下すことにはまだ至っていない。

② 道徳エンハンスメントと拡張心

「心は脳を超え、環境の事物によっても実現される」という「拡張する心」の議論を踏まえて、道徳エンハンスメントを捉え直すという試みを行おうとした。具体的には、Neil Levyの「道徳的対称テーゼ」(大まかには、道具使用を含む外部環境の変化で認知能力の向上を図ることが許容されるならば、神経医学的手段での認知エンハンスメントも許容されるべきである、というような主張)を道徳エンハンスメントに適用し直した上で、その議論を批判的に検討しようと試みた。

全体を通じて、研究期間内には論文としての成果を出すことができなかったが、今後さらにそれぞれの研究内容を深化させていき、成果発表につなげたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoshiyuki Hayashi
2. 発表標題 Moral Enhancement through Indirect Modulation of Emotion
3. 学会等名 Closed Workshop at National Singapore University (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 林 禅之
2. 発表標題 情動の間接的な調節による道徳エンハンスメント
3. 学会等名 ワークショップ「道徳エンハンスメント：情動と環境という観点から」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshiyuki Hayashi
2. 発表標題 Unconscious Pain: A Tentative Framework for Discussion
3. 学会等名 Philosophy of Medicine: Approaches and Perspectives (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ワークショップ「道徳エンハンスメント：情動と環境という観点から」2023年9月18日、京都大学にて開催

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高木 裕貴 (Takaki Yuki)		
研究協力者	福原 慶 (Fukuhara Kei)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------